

やっぱりハワイ！

（念願のハワイで暮らして）

早川 私はハワイ在住三十年なんです。最初はハワイに行ったきっかけは、熱高の同級生にハワイの有名私立校ブナホウスクールとの交換留学の第一期生がいて、彼がハワイにかぶれて帰ってきて、その影響で、ハワイのイメージが頭の中まで膨らんでいったからです。それまでもアメリカで仕事をしたいと思っていて一九七四年にはじめてアメリカ本土とハワイに行きました。

番魅力と可能性があると思いい、ハワイに支店のある日本の中小企業の印刷会社を見つけたんです。新入社員などまったく募集していない、その東京本社にいったら、社長に直接「ハワイに行きたいから雇ってください」とやりました（笑）。

新城 それはすごいな。

早川 ユニークだったこともあってか雇っていただけでした。そして、入ってから二年目に念願叶ってハワイに行きました。その会社で十八年いて、結局、日本に転勤になったんですけれど、やっぱり、当初の目的だったハワイに戻りたいと、そのときにもう永住権をもっていましたので、退職して、ハワイ州観光局に入省しました。

それ以来、ハワイで初めてのウクレレ専門店をつくったり、情報誌アロハストリートを出版したり、仕事はいくつか変わっているんですが、ずっとハワイで日本のマーケティングの仕事が続いています。

また、ハワイに渡った直後にハワイ三田会に入会したんですが、この先輩にはいろいろと助けられましたね。ハワイ三田会は他の大学の同窓

新城 じょうろ あきら
早川 はやかわ おさむ 治
井上 うえま 真紀



新城 師 ネットワークコンサルタント・エンジニア。1970年度徳義塾高等学校卒業。国際通信フリージャーナリストとして活躍後、95年にハワイへ移住、ハワイ政府観光局日本語HPの開設にあたっては翻訳とコンサルティングを手掛けた。

クラブに比べてまとまりが強いんですね。すぐに幹事をやらされましたが、六年前に副会長になって三年前からは会長をやらせていただいています。

かどうかという時代でした。ハワイでも大騒ぎで、日本から高校生が来たこと、新聞の一面に載ったり、テレビやラジオも取材にきて、州知事やホノルル市長にも会いました。

新城 私も先ほど話に出たブナホウとの交換留学生の一人として、一九六九年、高校三年生の時に六週間ハワイに行きました。一九六四年に一般の日本人が海外に自由にいけるようになってから、たった五年しかたっていない。いまは高校生がハワイへ行くなんて、珍しくも何ともないけれど、当時は一生に一回海外に行ける

ハワイにいったことによって完全に人生が変わったんだと思います。みんな、日本に帰りたいくない、帰るときには、絶対また来るぞと言っていた。井上 それで、またハワイに帰って行かれたわけですか。

新城 私はその後、一九九四年に重い病気にかかったんですよ。もしかしたらもう人生残り少ないかもしれないと言われたので、これは絶対、自分の夢だったハワイへ行かないといけないということで、翌年念願が叶って引越しました。

そこでやった仕事は「ハワイ州政



早川 治 議員（昭51法）。ハワイ三田会会長。ハワイ州観光局認定ハワイスパシャリスト。1978年よりハワイ在住。日系人、日本人観光客に対するマーケティングを中心に多方面で活躍中。



井上真紀 塾員（昭62政）。ジャズボーカリスト、舞踏家、ハワイアン文化・フラ研究家。ユニット「ラブ・ノーツ」のコ・リーダー。93年にはインターナショナルフラコンペティションで優勝、日本のフラ界でカリスマ的存在として活躍中。

府視光局の日本語ホームページ」の作成。当時はインターネット草創期でしたから、珍しかったんです。その関係で、視光局にいた早川さんと知り合ったんですね。他にもいくつか日本語ホームページとかつくりましたけどそれだけでは食べていけないので、結局一年ちよつとで、日本に帰ってしまったんですが。私のハワイとの関係というのは、とにかく最初の一九六九年の留学に尽きると思います。

（大自然のなかでフラに出会う）

井上 私が最初にハワイを意識したのは、小学校一年生のときにはじめてアメリカ本土にサマーキャンプに行ったときです。アメリカ東部、バモント州にあるのに、なぜか「アロハキャンブ」という名前のキャンプだったんです(笑)。みんなでアロハの歌を歌ったり、周りのキャンプも「アロハマナー」とか、何かとい

うとハワイにちなんだ名前でした。

その帰りに家族でハワイに寄ったんですけれど、正直言つてそのときはあまり感動しなかったんですね。ところが母はそこでもうすっかりフラの魅力にとりつかれて、自分で先生を探してフラを習い始めました。そのときに私も一応生徒の一人として駆り出されたんですけど、あまり興味もてなかったんです。

早川 それがどうして、フラにのめり込むことになったんですか。

井上 大学生のときに、はじめてオアフではなくてハワイ島のヒロにいったんです。ちょうど「メリー・モナーク・フェスティバル」というフラの祭典の時期で、ヒロの空港に降りたつてから車でバナヤン通りのほうをずっといくと、ここには精霊がいるという感じがしたんですね。

子どもの頃「ナルニア国物語」が愛読書でしたが、その世界に迷い込んだみたいで、ここにはそれがすべ

であると思つたんです。木が全部巨大で、生命力に満ち溢れていて、いまにも動き出しそうな感じ。植物も葉っぱが生き生きとしていて、脈打っているかのようで。ここはいったいどういうところなんだろうと思つたのが、たぶん私にとって初めての本当の意味でのハワイとの出会いだったんじゃないかなと思うのです。

早川 そのときに本物のハワイに出会ったと。

井上 フェスティバルのテーマは「雨と風を伴う風」で、全部の踊りがそれにまつわるものだったんですけど、外で嵐がどんどんひどくなつていって、途中で停電になったんです。

そうしたらオアフからきていたハラウ（フラの学校）の一つが、フラというのはスピリチュアルなもので、雨や嵐や大自然を動かしている。これ以上うちの生徒たちを危険にさらすわけにはいかなからと言っ

て、棄権したんですね。それもまた、ものすごく衝撃的で、ああ、やっぱり私がさつき感じていたものは本当だった。この国ではそういうものがいまだに息づいていて、それがすごく身近なところにあるのだと。

いままでは、ワイキキのように海にもショッピングにも行ける、観光地として楽しいところというイメージだったのが、それとは別の現地の人たちのハワイというものが、まるでパラレルワールドのようにあるんだということがわかりました。私のなかでハワイというところがもうただの旅行で訪れるところではない、何か深いつながりを感じるところに変わって、それからはそのときの興味を自分なりに探求してきているという感じなのです。

早川 ハワイにお住まいだったことはありますか。

井上 住んだことはないのですが、一時ハワイ大学ヒロ校に入っていた

ことがあったんですね。でも、日本でも仕事をしていたので、一カ月学校にいつて、一カ月日本に戻つてきてということも、一年ぐらいやつたことがあります。でも、疲れて体も壊してしまつて、これはもう無理だということになりました。それだけそこにいたいという気持ちが強かつたんですね。

（地球ができる過程が見える）

早川 いまおっしゃったことは、すごくよくわかりますね。僕は井上さんほどスピリチュアルな感受性がありませんですけど、いま考えてみると、前世はハワイにいたんじゃないかなと思うくらいハワイに惹かれるんです。なぜ好きとか、どこが好きというのにはあまりよくわからないんですけど、確実に自分を惹きつけるものがあるんですね。

早川 マウナ・ケアのあたりや、カウアイ島にもスピリチュアルな話は

いっぱいありますね。オアフ島でもちよつと上のほうへ行くといっぱいそういうところがありますし。井上 そうです。こんなところがオアフにあったのかというような素晴らしい場所がありますね。

早川 みんなハワイと言えど海というイメージをもっていると思うんですが、私は山のイメージが強いんです。ビッグアイランド（ハワイ島）なんかまさにそうですね。オアフ島でもちよつといくと結構山というか鬱蒼とした場所がある。そういうところへ連れていくとみんなびっくりしますね。ハワイってこんなところだったのかと。南のほうと北と全然違うんです。ハワイでスキーができることもあまり知られていない。

早川 数百万年という単位だと思えますが、ハワイ諸島ができるプロセスで、下から溶岩が噴き出る、ホットスポットの上に島ができていくわけなんです、ハワイ諸島のなかでは

ハワイ島がいちばん新しいんです。北西の方向に太平洋プレートが動いていく過程で、地球が活発に活動して溶岩がたくさん出ているときは大きな島ができる。その地球のパワーというのが、スピリチュアルな部分にかなり関わっているんじゃないかなと思うのです。つまり、新しく大きな島はどスピリチュアルなパワーが強いということなんです。

新城 ハワイ島って面白いですよ。地球ができていく過程を島一個で見ることができると。

（ハワイと日本の関わり）

井上 ある種の懐かしさがハワイにはありますよね。日本の文化を調べていくと、フラとたくさん共通点があります。イリイリという石の楽器があるのですが、はじめてそれを持って、歌い、踊ったとき、とても懐かしい気がしたんです。最近では知

れば知るほど、ハワイと日本は一つだったんじゃないかって思っているんです。

一説によると、かつて日本とハワイというのとは一つの塊であって、それが分かれて離れていったという話もあるそうですね。沖繩のほうにも、似たような古代遺跡があるそうですね。

新城 沖繩とハワイというのは、結構共通点があるんです。ハワイの伝説と沖繩の伝説とで同じような話があったり。

それから政治的な面でも、琉球王国とハワイの昔の王国の運命の変遷みたいなものが似ている部分があるんです。また明治時代にハワイのカラウア王が、提携しようと日本に來ているんですね、もしそのときに話がうまくいっていたら、ハワイは日本になっていたかもしれない（笑）。日本人の移民もそこから始まったんでしょうか。

早川 公式な日本人の移民が始まっ

すよね。

早川 一部はそうですね。ただ、国会議員や経済人などは日系人が非常にパワーをもっている。だから、ハワイ社会では、まだまだ日系人が強い影響力を持っています。

そういえば、新大統領のパラク、オバマはオアフ島生まれですよ。白人に対してあまり劣等感をもたないハワイで子供時代を過ごしたわけで、その影響は彼の潜在意識にのこつてると思います。人事を見ていても、非常にフレキシブルにいろいろな人種を使っていますよね。良い意味でこれからのアメリカの外交スタイルにも変化がでてくるんじゃないかと期待しています。

新城 ただ、オバマは選挙キャンペーンをやっているときには、あんまりハワイのことを言いませんでしたね。自分はシカゴの人間だみたいな言い方で、あんまりハワイを表に出さなかつた。

井上 だから、私はハワイ生まれだと知らなかつたんです。

早川 でも、彼の周りにあまり人種の壁は見えないんです。

オバマが生まれた病院というのは、プナホウ高校のすぐ隣にある、カピオラニ病院なんです。うちの息子も娘もそこで生まれたんです（笑）。

新城 早川さんのお子さんは新二世ということになるわけですか。

早川 私が新一世なので、そうなります。ハワイでは「戦後一世」という言い方もしますね。

新城 十九世紀に移民された方の子孫は六世とかいらつしやるでしょうね。

早川 もう生まれているでしょうね。上院議員のダニエル・イノウエなどが三世で、彼らの世代は大きなパワーをもっていました。そして今は、だんだん四世の時代に移っています。

たのは一八六八年です。オアフ島とか、サトウキビの畑を開墾した労働力の中心が日本人移民です。一九〇八年までの四十年間に七万四千人もの日本人が移民してきたそうですね。いまは少し下がりましたが。少し前まではハワイの人口の二五％が日系人だったんです。

新城 ハワイでいちばん多いのが日系人ですね。今年にはハワイがアメリカの州になってから五十周年ですが、当時は、白人から自分たちはマイノリティーだからハワイを州にするのは嫌だという苦情があつたらしいです。

早川 アメリカ本土と比べて、際立って日系人のパワーが強いのはハワイだけなんです。本土へいくとやっぱり白人社会が強いし目線が高い、でも、ハワイでは逆に、日系社会の方がパワーがあるんです。

井上 でも、皮肉なことに豊かさを握っているのはやっぱり白人なんです。

僕はいま、ハワイの日本語テレビ局で、日本人と日系人のために日本のテレビ番組を放送しているんです。日本の番組は人気があるんですが、番組を放送するときに、英語の字幕をつけないと日系人はあまり理解できない。

新城 「水戸黄門」などの時代劇にも英語の字幕がつく。あれは見ていて結構おもしろかったですよ。

早川 アメリカのなかでもハワイがいちばん日本語のテレビ放送が多いんです。そういう意味では日本語と日本の文化の理解度は、ほかの州に比べてハワイは非常に高いと思います。

新城 でも、パール・ハーバーというのはハワイにとっても切り離せないテーマですが、どうも日本人はちょっと避けて通っていくところですか、あまり触れられたくないところですね。よく言われるんですが、アメリカの観光客がハワイでいちばん最初

に行くのはパール・ハーバーで、日本人観光客がいちばん最後に行くのがパール・ハーバーだと。

早川 でも、ハワイに住んでいると、そういう話は何かの記念行事のときを別とすれば普通の生活ではほとんど出ませんよ。

新城 日系社会と白人社会が分かれているところというのはあるんですか。

井上 私の印象だと、どちらかというと日系社会と白人社会は近いところにあって、ハワイの血の濃い人たちが蚊帳の外になっている。彼らは意識のなかでは白人を差別しているようなところがありますね。

早川 国を取られたという感覚がどこに残っているのでしょうか。例えば、ハワイの州旗をわざとさかさまにして、トラックにつけて走っているハワイの人たちがいます。自分たちはこのハワイの州旗を認めてないぞ、という意味です。

い。

早川 三十年間住んでいて、体に感じた地震というのは三回ぐらいです。僕は総領事館の「ハワイ安全連絡協議会」で、津波など緊急のときの連絡のネットワークを作っているんですけど、いちばん怖いのは日本の地震なんです。

井上 日本で地震が起きると、その影響でハワイで津波が起きるんですか。

早川 オアフの太平洋津波センターでは、いつも世界中の地震をモニターしていて、海のなかの地形をシミュレーションでみると、日本周辺で起きた地震が、いちばんハワイに大きな影響を与えることがわかってい

るんです。逆に、トンガ沖とか、あとインドネシアなどで地震が起きても影響が少ない。
新城 どちらかというところ北のほうがくるんですね。
早川 でも、太平洋のど真ん中なん

新城 「カマアイナ」という言葉は、いまおっしゃったブラッドの問題と関係があるんですか。

早川 それは関係ないです、ハワイの地元民であればみんな「カマアイナ」と呼ばれます。

（ハワイでは歳をとらない？）

井上 早川さんにとって、ハワイの最大の魅力はなんでしょうか。

早川 気候ですね、やっぱり。実は、僕は気管支喘息があつたんですけど、ハワイにいったら発作が一切なくなつた。体にあつて住みやすいところなんです。

また、実際に住んでみるとわかるのですが、春夏秋冬というのがほとんどないものだから、歳をとつていくという感じがあまりしない。

井上 日本だと、秋が来たなあとか、ああ、もう夏が終りだとか、そういうふうな時の経つを感じますけれど。

で、津波がくるまでに大体四時間から五時間以上時間があるので、その間ある程度避難はできる。

ハワイらしいのは、ハワイの太平洋津波センターが出している英語のパンフレットに、大きな字で「津波では絶対サーフィンをしないように」と書いてある（笑）。

井上 そういう人もいるかもしれないですね。今回はすごい、一生に一度のチャンスとか言つて（笑）。

早川 四〇フィート、五〇フィートの波がくると、サーファーじゃなくても見物に行く人は行きますからね。

（日本人を惹きつけるハワイ）

井上 私はハワイの言葉も素敵だと思ふんです。やっぱり言葉があるという感じなんですか。言葉を通じてハワイの人のメンタリティーをうかがい知ることがあります。例えば、アンコールという意味で

早川 そうです。木もそういう四季があるから年輪ができるわけですから、椰子の木って年輪がない（笑）。

井上 私は「浦島太郎」という物語は、日本とハワイをつなげるものだと思つていたんですが、いまのお話を聞いて、ますます浦島太郎はハワイに行つて来たような気がしてきました。カメと一緒に（笑）。

早川 カメはいっぱいいますね。ワイキキでも海ガメが見られます。僕は泳いでいてぶつかったこともありますよ。

新城 えっ！ カメと。

早川 ヒレかなんかだったんですがサメかと思つたぐらいびっくりしましたね。サメはいますけど、あんまり浅いところには来ません。

それから、ハワイの海の注意報というところ、電気クラゲなどもあります。一番怖いのは津波警報です。

新城 あれは怖いですね。ただ、火山もあるのに、ハワイでは地震はな

の「もう一度」を「ハナホウ (Hana Hou)」といいます。「ハナ」というのは「何かをする」という意味で、「ホウ」というのは「もう一度」という意味なんですけど、「新しい」という意味もあるんです。つまり、いまやったことを「もう一度新しくやって」という意味なんです。いまやったことをもう一度繰り返すと考えるのと、「さあ、もう一度新たに」というのとは全然意識が違うなと思

い、印象に残っているんです。そうしたらイタリアにも同じ表現があることを最近知つて、「ヌオヴオ」というのが「新しい」という意味なんですけど、「もう一度」という使い方もあるそうです。イタリアも古い文化の国ですが、ハワイも含めて古代文明は全てつながっているのだと思います。

新城 ハワイって、いちばん最初はポリネシアのほうから舟でやってきた移民でしたよね。

早川 でも、太平洋のど真ん中なん

早川 ビショップ博物館の篠遠博士という日本人のポリネシア文化研究者は、古い釣針の形の研究をして、ハワイ人が使っていた釣針と、イースター島やタヒチなど南太平洋の島々で見つかった釣針との共通性を見つけているんです。

井上 ホクレア号というカヌーに乗って来たということですね。むかし縄文時代の日本にサバニ船という船があって、それがそっくり同じだったと言われています。

ハワイの歴史は、そんなに古くないそうなんですが、私はあの島はどうもずっと古い島のような気がするんです。これだけ日本人がハワイに惹かれて、いまこんなに日本でハワイアンやフラがブームになっている。これは単純にフラメンコが大ブームになっているのとは違う気がするんです。何かもともと私たち日本人の集合的無意識というか、魂に働きかけるものが、ハワイにあるとしたら

思えないんですね。ほとんどの人が、ハワイへ初めて行ったのに、「懐かしい感じがする」と言うじゃないですか。

早川 たしかに日本人の海外旅行でアメリカに旅行する人のうちの五〇％がハワイ旅行です。なにか日本人を強く惹きつける魅力というのがあるんじゃないかと思っています。

井上 日本人の観光はハワイに始まってハワイに終わると言われていますよ。すこく簡単に往けるからと、まず最初にハワイに行くと、それからいろいろなところを回って、結局ハワイに戻ってくる。

早川 いま日本人観光客の六五％ぐらいがリピーターです。ほかの観光地でもこれほどリピーターが多いところは少ないです。

僕がハワイ観光局にいたときですが、日本人観光客が年間で二一七万人訪れたのは、いまでも記録になっています。昨年はその約半分で、一

一六万人でしたが、それでも一日に日本からジャンボ機が十二便も来るとです。

（ハワイで暮らす一番の方法は？）

井上 逆に早川さんは三十年住んでいらして、もう日本に帰って来たいと思われたことはないのですか。

早川 休暇ではいつでも帰りたいですが、もう永住帰国はないですね。僕が渡った当時は、いまみたいにインターネットとかもなかったし、ある意味で暮らしにくい部分が多かったです。日本の音楽とか、リアルタイムの日本が全然わからない。新聞も「ハワイ報知」とか現地の新聞を読むぐらいだったんで、日本の情報が入ってこない。そういった意味で、隔離されたような状況だったんです。

でも最近ではリアルタイムで日本のテレビも見られますし、インターネ

ットがあるのでハワイに住みながら日本とまったく同じ生活ができる状況になってきています。食物もなんでもあります。銀座の老舗とんかつ屋「梅林」もあります。

新城 いまでは逆に、ロコモコとか「スパムむすび」などが日本で食べられるようになりましたね。

早川 そうですね。日本人が海外でもし生活するのであれば、ハワイというのはいちばん暮らしやすいところじゃないかなと思います。

外務省の都市別の海外在留邦人数の統計を調べたことがあるんですが、在留邦人がいちばん多いのはニューヨークなんです。次がロサンゼルスで、ホノルルは三番目。それから、永住権をもっている人の数だとホノルルは二番目なんです。でも、日本人人口の割合で永住率を比較するとナンバーワンです。それだけ日本人の永住に適しているんだと思います。

新城 ただ、ハワイって仕事がないですよ。だからすこいお金持ちで何もしないで生活できる人ならいいんですけど、普通の人がパツといつても、仕事はないし、就労ビザを取るのはいかに難しい。

早川 ハワイに住んでいながら、日本での仕事をするというのが理想だと思っています。僕はよく、ハワイの日本人観光客や日系人を対象にしたビジネスについて相談を受けるんですけど、「やめたほうがいいですよ」と答える場合が多いんです。目的がビジネスそのものではなく、ハワイに住むことなら、日本から離れていてもできる仕事を作って、それからハワイに来るのがいちばんいいでしょう。

井上 移住したいと希望する日本人は結構くるんですか。
早川 昔より増えてきましたね。最近では特に年配の方が多い。もし年配の方でハワイに住みたいということ

であれば、いまはビザを取らなくても年間六カ月までなら住めるんですよ。ただ、続けては住めないのです。カ月単位になりますけどね。

（風の気持ちよさ、虹の素晴らしさ）

早川 先ほど僕がハワイに暮らす魅力を開かれたとき、気候と言いましたけど、気候の中でもいちばん好きなのは「風」なんです。貿易風が一年中吹いていて、その風が運んでくる自然の花や海の香りは、言葉では言い尽くせない、大きな魅力です。新城 たしかにハワイの音楽を聴いていても、風を感じる音楽が結構多いですよ。

早川 よく日本人観光客がホノルル・エアポートに着いて、飛行機のドアが開いた途端に、花の香りがすると言っています。その匂いを運んでくるのはやっぱり風なんです。新城 ハワイに四季はないと言いますが、多少はあって、日本人は南国

だから冬に行ったほうがいいんじゃないかとおっしゃる方が多いんですけど、初めて行かれるなら、夏がおすすめです。夏の風のあの気持ち良さ。日本の蒸し暑い空気なんて絶対ないですから。真夏の日本の暑くてどうしようもないときに、ハワイにいったあんな風に当たると本当に気持ちいいです。

早川 ハワイは、十一月から三月ぐらいまでが雨季ですが、日本の梅雨のように一日中降るのではなくて、朝と夕方にシャワーが多くなるぐらいなんです。

そして、虹は一日何回も見えます。まん丸の半分がきれいに架かり、二重の虹もあるし、三重の虹もあるんです。虹が二重になるときは、内側の虹と外側の虹では、色の順番が反対なんです。

井上 あと、岩山のゴツゴツしたへこんでいるところに虹がパーッと架かると、まるで動物のクリスタルの

中にある虹のように見えます。前に見たことがあるんですけど、とても感動的でした。

早川 虹はハワイのシンボルなんです。車のプレートや免許証にも書いてある。

また、貿易風が強いと雨雲のスピードがすごく早いです。だから道のこちら側で雨が降っているのに、あちら側では晴れとか、そういうのはしょっちゅうあります。だからハワイの人は傘をもっていない。濡れなくても乾いてしまう。僕がもっているのはゴルフの傘だけなんです(笑)。

（ハワイの歌から知る日本人の心）

井上 フラを通してハワイの歴史を知ること多いのですが、その一つに、ラハイナの町を歌った歌があるんです。とても素敵な歌で、ホテルとかレストランとか、どこへ行ってもよくかかっていたんです。

をずっと探し続けているようなところがあつたと思うのです。

一方、日本は全然違う歴史をたどっているように思っていたんです。知らない間に私たちが自分たちのアイデンティティを失いつつあるんじゃないかと思いました。そのことに気づかずに、いつの間にかすべてがなくなっているのではと。それこそ残して置いておかなくてはいけないようなものでも、どんどん取り壊して、高いビルを建てている。

ハワイのことを知れば知るほど、いま置かれている日本の状態とか、あと、本来の日本人の心みたいなものをすごく感じさせられるんですね。

だから、フラをやっている者としてただ単に外国の自分たちと関係ない文化にうつつを抜かしているだけではないんです。逆に、ハワイの文化に触れることにより、日本人とし

ての自分のルーツに触れているような気がするんです。

新城 アロハスタジアムで蚤の市をやっているんですが、そこへ行って、年配の日系の方とお話すると、いまの日本になくなってしまった昔の日本がそのままそこにあるんです。言葉は多少違うんですが、昔の日本ってきつとこういう人たちがいたんだと思って、何かいきなり時間と空間を超えて、昔の日本が目の前に現れたみたいな感じがしました。

井上 それがすごく温かくて、懐かしくて、こういうところに帰れないんだらうかと、やっぱり思うんですね。

新城 たぶん帰ることは無理でしょうけどね(笑)。

早川 年に一回ぐらい日本に来るんですが、ほんとうに変化の速さにびっくりします。新しいお店ができて、古くからあった店がなくなったり、古くからあった店がなくなったり。ハワイでは、ワイキキと、

マウイ島ラハイナの町はいまは観光地になっていて、熱海みたいな感じでもいいお土産屋さんがあるようなところなんです。でも、昔その町に王族が来たときはみんなが平伏して、彼らが乗った船は誰も見てはいけないと言われ、船が着く港も聖なる場所として大事にされていました。その歌は、「そこに住んでいたといわれる大きな龍の女神はいま頃どこにいらっしゃる」という問い掛けで終わるんです。結局そういうものが全部、近代化で壊されたり、失われたりしたんだということを暗に言っていると思うのです。

早川 なるほど。

井上 ハワイの人の間ではここ二十年、二十年、ハワイ人としてのアイデンティティを強く持つという、大きな運動が起きています。アメリカに併合されて、ハワイ語を話すことも禁止された過去があるので、逆にその反動で自分のアイデンティティ

あとマウイのラハイナなど、観光客が多いところは別にして、その他の変化はゆっくりしています。

新城 たぶん十年やそこらでは全然変わらないでしょうね。

早川 ハワイで売買できる土地の九〇％は農地指定だそうです。開発してホテルやゴルフ場を作ったり、住宅地にすることが許されるのは、残りの一〇％しかない。だから、ほとんどの部分は変わらないで残っています。そのように文化を守ろうという意識は、ハワイの人たちは非常に強いのではないかと思うのです。

新城 逆に言うと、日本人はそれがすごく稀薄なんじゃないかという気がします。

早川 ワイキキの変化はすごく早いんです。お店もあつたという間に新しい店に変わっていて、びっくりする事もよくあります。

井上 日本人のためですからね(笑)。